

エンディング A

阿望家の兄弟姉妹の視線は、刑事・黒岩鋼に注がれていた。

翡翠 「私の潔白を示せるかどうかの焦点^{しょうてん}は、2月10日14時ちょうどに、監視カメラに映っているのが私なのか怪盗ホープなのか。でも、この問題は黒岩さんが持ってきたこれが解決してくれました」

翡翠は黒岩が持ってきた、メインホールの入室記録を見せる。

翡翠 「2月10日14時ちょうど、怪盗ホープである黒岩さんはゲートを通してホールに入室している。よって、中庭の監視カメラに映っていたのは私で間違いない。だから私は犯人じゃない」

翡翠 「残ったのは一人だけ——あなたが犯人です、黒岩さん。事件当日、あなたは変装してゲートを通過し、飛ばしのスマホをホール内に置いた。それから変装を解き、ゲートを1回だけ通過することで、自分が潔白であると見せかけたんです」

刑事達が黒岩を連行していく。黒岩は最後まで犯行を認めなかった。

黒岩 「……犯人は俺じゃない。誰が犯人かは知らんが、この借りはいつか返させてもらうからな。覚えておけよ」

けれど、その言葉が叶うことはなさそうだった。

この一週間後、犬吠埼が嘆きのダイヤとともに姿を消したからだ。

それはちょうど、証拠として警察に押収されていた嘆きのダイヤが返却され、捜査中に傷やくすみが出ていないかを確認するために、保険会社に預けられた日のことだった。

それからさらに一週間後、阿望家に犬吠埼瑠璃からの手紙が届いた。

.....

探偵の手紙

皆さんがこの手紙を読んでいる頃には、私は嘆きのダイヤとともに姿を消しているはずです。あまり考えたくありませんが……もしもそうでないとしたら、きっと、皆さんは事件の謎を解いてしまったのでしょうか。

これからするのは、私がどうして阿望^{つよし}剛さんを殺したのかの話です。

そしてこれは、どうして彼が嘆きのダイヤを手に入れ、皆さんを無理矢理に集めてまで宝石展を開いたのかの話でもあります。

でもまずは、私が捜査を攪乱^{かくらん}するために告発した（今はまだ告発予定のと書いておくべきでしょうか）黒岩さんの潔白を証明しておこうと思います。

黒岩さんが犯人だとすれば、彼は変装してセキュリティゲートを通過——飛ばしのスマホをホール内に置き、自分の潔白を示そうとしたことになります。

このとき当然、黒岩さんは変装して飛ばしのスマホを置くのを除いて、ゲートを1回しか通ってはいけません。ゲートを2度以上通過すると、自分がスマホを持ち込めなかった、という潔白の証明ができなくなりますから。

確かに事件当日はそうでした。

でも、それ以前の日はどうでしょうか？

シャンデリアがいつ落下するか——どの日に事件が起きるかは、犯人にもわかりません。だから黒岩さんが自分の潔白を示すためには、2月13日と同様、他の日もセキュリティゲートを1回しか通らないようにする必要がありました。

でも2月10日から12日まで、黒岩さんはどの日も2度メインホールを出入りしています。皆さんも、煙草休憩のため、手ぶらでホールを出ていく彼の姿を見ているのではないのでしょうか？

加えて、事件当日に黒岩さんが浅尾^{あさお}さんに変装していたとしたら——つまり浅尾さんが日記に残した『毎日お昼に通っているお気に入りの場所』が宝石展のことではなかったとしたら——10日から12日に宝石展に来たのも、黒岩さんが変装した浅尾さんだったことになります。

つまり黒岩さんが犯人だと仮定すると、彼は他人に変装してゲートを通過する工作を行っているにも関わらず、わざわざ自分の潔白を示せなくしている訳です。流石にこんな不合理な行動をとる犯人はいないでしょう。

よって、黒岩さんは犯人ではありません。

事件当時、メインホールにいた容疑者5人には犯行は不可能でした。

犯人について、警察はおそらくこう考えているはずです。

犯人はシャンデリアの異音を聞くことができ、飛ばしのスマホをホール内に置ける人物。だから事件当時にメインホールにいた人物だ、と。

前半はその通りです。でも、後半は正しくありません。

当時メインホールにいた5人全員の潔白が示されてしまえば、これは明らかです。ホール内に犯人がいなかったのであれば、犯人はホールの外からシャンデリアの異音を聞くしかありません。

犯人はどうやって外から異音を聞いたのか？ その手がかりは「停電の直前に堇青さんは通話中だった」という日長さんの証言の中にあります。

皆さんは、堇青さんにこう尋ねれば良かったんです。

そのとき、シャンデリアの異音は通話相手にも聞こえていなかったか、と。

通話で異音を聞くことができたとなれば、犯人の条件は飛ばしのスマホをホール内に持ち込めるか否かだけ。飛ばしのスマホをホール内に持ち込むためには、2度以上セキュリティゲートを通過する必要があります。

そして事件当日、皆さんを除いてゲートを2度以上通過したのは私だけでした。

私が用意したトリックは単純なものです。

まず昼過ぎにメインホールを訪れ、自分のスマホを人目の付かないところに隠してからホールを出ました。その後はずっと、手元にある別のスマホを隠した自分のスマホと通話中にしていたんです。

これでスマホ越しにシャンデリアの異音を聞くことができました。

19時過ぎ、異音を聞いて飛ばしのスマホで停電発生装置とレーザーポインターを起動しました。当然すべてメインホールの外からです。

その後に堇青さんから連絡が来て（連絡がなくても適当な理由を付けて向かうつもりでしたが）、私は飛ばしのスマホを持ってメインホールに向かいました。私はこのとき初めて、飛ばしのスマホをメインホールに持ち込んだのです。

ホールに入ったら、殺人であることを証明すると言って再び停電を起こします。

そして停電中の暗闇に乗じて、ホールに隠していた自分のスマホと持ち込んだ飛ばしのスマホを入れ替えました。

ここが一番気を遣った部分です。スマホの入れ替えに気付かれないよう、カバーケースを付け替え、その後に自分のスマホを停電発生装置に登録する必要もありましたから。

でも、すべて上手くいきました。誰も私がやったことに気付きませんでした。

すみません、話がだいぶん逸れてしまいました。動機の話に戻ります。

事件の発端は20年前の阿望^{りんよう}燐葉さん——皆さんのお母様の死にあります。

燐葉さんの死を、剛さんは嘆きのダイヤのせいだと考えました。嘆きのダイヤには触れたものの魂を吸い取って死に追いやる、という噂もありましたから。

もしかすると、皆さんはここで少し変だと思われるかもしれません。

燐葉さんは嘆きのダイヤになんか触れていないはずだ、と。

普通に考えればその通りです。

燐葉さんは、嘆きのダイヤを握って飛び降り自殺した女性の死体を発見し、パニックになって通報せずに逃げただけなのですから。

その過程で嘆きのダイヤに触れる必要がありません。

しかし剛さんの行動を踏まえると、燐葉さんが嘆きのダイヤに触れたとしか考えられないのです。

多分に想像を含みますが、20年前に起きたのはこのようなことでしょう。

女性が嘆きのダイヤを握って飛び降り自殺し、地面にぶつかってダイヤが彼女の手から離れた。そして、その近くには当時6歳の月長さんがいた。彼はよくわからないまま、転がってきたダイヤを拾ってしまう。それに気付いた燐葉さんが月長さんからダイヤを取り上げ、女性の死体のもとに戻す。

このとき、燐葉さんは慌てていて、死体を月長さんから隠し^{そこ}損ねたのでしょう。月長さんは死体を目撃し、ショックで全てを忘れてしまった。

月長さんに20年前、事件当時の記憶がないのはこのせいでしょう。

おそらく、燐葉さんがパニックになって通報を忘れたというのも真実ではなく、本当は幼い月長さんを事件に巻き込みたくない一心だったのだと思います。

後の警察の捜査で燐葉さんが誤認逮捕されたことを考えれば、この行動もあながち間違いとは言えません。6歳児でも事故で人を殺してしまう可能性はありますから。

そういう訳で、燐葉さんは嘆きのダイヤに触れており、それを剛さんも知っていました。

そして彼はこう考えたんです。

もし嘆きのダイヤが魂を吸って人を殺すなら、殺された人の魂は嘆きのダイヤの中にいるはずだと。

だから彼は妻を殺した嘆きのダイヤを購入し手元に置いた。だから彼は皆さんを集め、宝石展を開いた。すべて家族揃って過ごすためだったんです。

堇青さんと日長さん、翡翠さんと月長さん、そして剛さんと燐葉さん——そこには家族6人が揃っていました。

少なくとも、阿望剛さんはそう信じていました。ずっとずっと、そこにいるのが燐葉さんであるように^{ふるま}振舞っていました。私までそう信じてしまいそうになるほどに。

だから私は彼を殺す計画を立てました。

彼を否定するために。彼が信じる燐葉さんを否定するために。嘆きのダイヤの中にいるのは燐葉さんではないと——不在証明するために。

.....

エピローグ

警察と対峙したあの日から一カ月半が経った。

堇青はますます弁護の依頼が増え、忙しく過ごしている。どうも逮捕しに来た警察を^{いっしゅう}一蹴したという噂が、彼女の評判を押し上げているようだ。

日長はここしばらく厄介な仕事を押し付けられていた。あの日協力してくれた元同業者が「貸しを返してもらおうぜ」と言ってきて以来、家にすら帰れない日々が続いた。

翡翠は長い間家に^{こも}籠っていた。そこで彼女が何を考え、何をしていたかはわからない。その間に不良品を販売していたという理由で何人かの業者が逮捕された。どうも警察に匿名の情報提供があったそうだ。

月長は20年前の記憶を取り戻した。それと時を同じくして、最近起きていたたびたび意識が飛ぶ症状も出なくなった。

月長 「20年前のあの日、僕は母さんと公園にいて……でも、誰かに呼ばれた気がして、一人で抜け出したんだ。そこに嘆きのダイヤが転がっていた」

月長 「僕はそれを拾って、それで……。人殺し、って叫ばれたんだ。少し離れたところに女性が血を流して倒れてた。彼女が僕を指差して——」

人殺し、人殺し、人殺し。

もう助からないと確信できるほどの血を流しながら、繰り返し叫んでいた。

月長 「そのときに母さんが来た。母さんは僕からダイヤを取り上げて、女性の手元に戻して、僕に言った。大丈夫、あなたは何も関係ない、何も怖いことはないから。それで僕の手を引っ張って家に戻ったんだ」

手を引かれながらも、月長は女性から目を離せなかった。彼女はまだ人殺しと繰り返している。

けれど、その瞳は月長を捉えていない。

視線の先にあるのは彼女自身の手握られたダイヤ。彼女は嘆きのダイヤに人殺しと言っていたのだ。

女性の瞳から光が薄れていく。最後に、彼女の唇が違う形に動いた。

——ごめんね……瑠璃……。

女性の手から^{こぼ}零れ落ちたダイヤは、夕日を反射して、まるで赤く輝いているように見えた。